

【Caretta caretta】

特集 アカウミガメ

他のまちにはないオンリー・ワンの宝物

このまちに住む誰もが、本地域にアカウミガメが産卵に訪れることを知っている。
御前崎のステッカーや名産品にカメが使われるほど、カメは私たちに溶け込んでいる。

アカウミガメとの関わりを振り返り、未来への展望を考えていく。

今年もカメが産卵

5月～8月、産卵場所を探し求めてこの地にたどり着くアカウミガメは、誰の目にも触れないように必死で産卵する。この生命の営みは、人類が誕生するよりはるか昔、今から2億年前の太古より続いている。

今年も御前崎にアカウミガメが帰ってきた。5月18日の早朝、市内の海岸を巡回していた市ウミガメ保護監視員の早馬春男さん（東町）が、ウミガメの上陸・産卵跡を発見した。初産卵の知らせに、6人の監視員と市社会教育課職員が駆け付けた。監視員らは砂浜に産み落とされたピンポン玉大の卵95個を保護。大切にふ化場へと運んだ。

卵を産み落とされた状態のままにしておくと、野生動物によつて掘り起こされたり、人間や車が踏みつけたりしてつぶされてしまう危険性があるからだ。近年では、砂浜の減少により、高波で巣穴が浸水または流失することがある。産卵場所に水が湧き、卵が腐

敗することも問題となっている。そのため、保護監視員が卵を保護し、人工ふ化場へ移しているのだ。卵は、2カ月程でかえり、保護監視員らの手によつて再び海へ放される。御前崎は、アカウミガメが集中的に産卵する北限地として、学術的にも貴重な場所であることや長年続く保護活動などの功績が認められ、昭和52年に県の天然記念物、55年には「御前崎のウミガメ及びその産卵地」として国の天然記念物にも指定されている。昭和48年から始まった本市監視活動のデータによると、少なくとも年間100頭以上が上陸。多いときには500頭を超す年もあった。

御前崎のカメ文化

私たちの国では、昔から「鶴は千年、亀は万年」といわれ、カメを長寿の象徴として、縁起のよい神聖なる生き物としてあがめてきた。

御前崎にも、古くから「木附きの満舟」とか「カメ枕の大漁」という言葉がある。海の中を漂う流木に付着するノ

表：アカウミガメの市内上陸頭数 /市教育委員会

